



北海道の生物多様性フォーラム 生物多様性 わかる・感じる。

北海道環境生活部環境局自然環境課

平成22年7月に北海道生物多様性保全計画が策定されたのを受け、広く道民、事業者の生物多様性への関心を高めるとともに、生物多様性保全を推進するため、9月25日(土)サッポロファクトリーで「北海道の生物多様性フォーラム『生物多様性 わかる・感じる。』」を開催しました。

フォーラムは、講演会とパネルトークの二部構成で進めました。

第1部の講演会の大橋弘一氏のお話では、北海道の生物多様性の素晴らしさを改めて感じながらその重要性を知ることができました。また、日比保史氏には、国内外の事例を交えながら生物多様性の危機や保全の最前線の動きをご報告いただき、生物多様性が私たちの生活に密接にかかわっていることを教えていただきました。

第2部のパネルトークでは、第1部の講師2名をパネラーに迎え、コーディネーターの草野竹史氏を含めた3名によるパネルディスカッションを行い、「北海道の生物多様性の今後」と題して、生物多様性保全において北海道に住む私たちは何をすべきかについて話し合いました。本稿では、パネルディスカッションに重点を置いて報告します。

第1部 生物多様性講演会

北海道の生物多様性～美しくも脆い^{もろ}自然

大橋 弘一 氏 北海道自然雑誌 faura 編集長

生物多様性“保全”の最前線

日比 保史 氏 コンサベーションインターナショナルジャパン 代表



第2部 生物多様性パネルトーク

北海道の生物多様性の今後～地域・市民の生物多様性保全の役割

北海道の魅力・身近にある豊かな生物多様性

草野 それではディスカッションの主題は、「北海道の生物多様性の今後」ということで、私たちが何を担えるか考えていきます。よろしくお願いたします。まず、大橋さんは道外出身ということですが、どのような気持ちで移住されたかをお話ししていただけますか。また、撮影を通して感じる北海道の魅力をお聞かせください。

大橋 私は、東京に生まれ育ち、北海道に移住したのは約21、22年前です。会社勤めをしていて転勤で札幌に来たのですが、それ以前にも北海道は好きで何度か旅行で来ていました。旅行と実際に住むのとでは見え方が違いますね。最初に感じたのは、関東周辺と景色が違うことです。針葉樹林が多いと思っていましたが、実際はそうではありませんでした。エゾマツ、トドマツは確かにたくさんありますが、落葉広葉樹が圧倒的に多いですね。秋は紅葉。冬には裸木に雪が積もる。春には瑞々しい新緑の季節になるわけです。四季が非常にはっきりしていて、これが北海道の魅力だと思いました。私が札幌に来た年の5月に寒の戻りで雪が降りました。瑞々しい新緑に真っ白な雪が積もったのを見たことがありませんでした。あまりの美しさに、写真を撮りたいと思ったのが今の職業に就くきっかけとなりました。

草野 北海道の魅力を発信する方は、実は道外の方が多くいます。これが、今日のポイントになると思います。生物多様性について身近過ぎて当たり前になり、実は気付いてないことが、行動に移し難い要因ではないかと考えています。日比さんは東京からお越しいただき

ましたが、いかがでしょうか。北海道はホットスポット^{*1}の一つだと思います

日比 日本は生物多様性が豊かです。ホットスポットに選ばれたとき、ハイテクの国のイメージの日本にそんなに生物多様性があったのかと、国際的に評判になりました。日本では一般にはあまり注目されませんが、海外からは西日本のオオサンショウウオなどは大変注目されています。また、北海道のイトウなども一部の科学者に大変注目されています。身の回りだと当たり前なことに実は世界が注目しています。逆に言うと、自分たちの自然は、日本人だけ道民だけじゃなくて世界の宝だということです。

草野 身近な自然が世界の宝という認識は持っていませんでした。札幌にヒグマが出ることも世界からは、「大都市にそんなに大きな動物が」と言われていますね。そんなふうに、近くに大きな自然があることが何かこの北海道の魅力と可能性についてのメッセージとなるのではないのでしょうか。ただ、数値データのような具体的なものがあって、初めて気が付くことが多いと感じます。大橋さん、北海道の自然についてあまり



コーディネーター
草野 竹史 氏
環境NGO ezorock 代表理事
1979年札幌市生まれ。酪農学園大学環境システム学部経営環境学科卒。在学中、国際青年環境NGO「A SEED JAPAN」の活動に参加したことをきっかけに、2001年に11人の仲間と共に環境団体「ezorock」設立。北海道最大級の音楽フェスティバル「RISING SUN ROCK FESTIVAL」における環境対策活動を中心に活動を展開。「地球のことを考えて行動する日＝アースデイ」・「アースデイ EZO 実行委員会」の設立・NPO法人北海道市民環境ネットワークの運営に参加。



パネラー
大橋 弘一 氏
北海道自然雑誌 faura 編集長
1954年東京都生まれ。20年余の野鳥写真家としての経験をベースに、2003年北海道自然雑誌 faura を創刊、編集長を務める。雑誌連載やテレビ出演などを通して自然を幅広く見ることの楽しさを提唱している。「北海道野鳥観察地ガイド」(北海道新聞社)、「庭で楽しむ野鳥の本」(山と溪谷社)、「鳥の名前」(東京書籍)など著書多数。



パネラー
日比 保史 氏
コンサベーション・インターナショナル
アジア・ポリシーバイスプレジデント 兼 日本プログラム代表
(樹野村総合研究所、国連開発計画を経て、2003年よりコンサベーション・インターナショナル日本プログラム代表。環境省生物多様性民間参画ガイドライン検討委員、JICA社会環境配慮助言委員、上智大学地球環境研究所非常勤講師など。企業のステークホルダーダイアログにも多数参加。著作に「生態学からみた保護地域と多様性保全」など。

^{*1} ホットスポット
多様な生物が生息・生育し、絶滅にひんした種が多く含まれる重要な地域。

知られていない魅力はありますか。

大橋 北海道では、イトウが遡上する河川は当たり前でした。当り前の地域の方から、ほんの10年前まで棒でイトウの頭をたたいて捕まえると聞きました。もしかしたら5、6年前まで、「こんなにたくさんいるのに獲って何が悪い」みたいな感覚だったと聞いたことがあります。ところが、今は絶滅危惧種に指定されています。一つの事例ですが、そういうことがあるのではないのでしょうか。また、最近イギリス人のバードウォッチャーが北海道にも多く来るようになりましたが、日本で彼らがまず喜ぶ鳥はヒヨドリです。私たちにとってはどこにでもいる鳥ですが、世界的に見ると、ほとんど日本列島にしかいない。イギリス人から見れば珍しいわけです。ですから、いろんな分野で、身近にいるものに関して当り前とってしまうことが、特に自然が豊かと言われる北海道では多い気がします。

日比 棒でたたくなどは、それだけ当り前だったのだろうし、自然との距離が近かったと思います。これも一つの日本の特徴でしょう。狭いし人口が多い割に生物多様性が豊かだというのは、世界でも珍しいことです。理由は海流や気候など、いろいろあると思いますが、肥沃な土壌で温暖湿潤、昔から人口密度が高いのも一つです。人も動物も住みやすく、狭いので、自然と近くなります。自然を守る最も効果的な手法は保護区の設定ですが、これは西洋の考え方と言われています。保護区とは自然を囲って触れないということですが、日本でそれが成り立つかということ、そもそも人間

が全く関与しない生態系は、実はあまりありません。日本が狭いためという理由もありますが、もともと自然と関わりを持ってきた文化なのです。例えば、ヨーロッパの中世都市は、日が暮れると城郭都市の門を閉めますね。童話などでも森は怖くて魔女が住んでいるような、人々が住む所とは区別した外の世界ですが、日本はそうではありません。身近な自然と関わり合っ

て生活してきました。都市的生き方と自然の関わりが近いという意味で、日本は世界から見て特異な街や地域だと思います。

草野 広い所であれば人と生物を分けて考えるところが、逆に日本では、少し重なり合っ

て暮らしているの、一緒に共存していくのを探すことになるのですね。
日比 そのとおりです。世界は人口爆発中ですが、そのほとんどが途上国で起きています。生物多様性が残された地域も、ほとんどが途上国にあります。10月に開催されるCOP10^{**2}では、新戦略計画という、国際社会としてどうやって生物多様性を守っていくかという目標を作る会議にもなります。その一つとして、陸域面積の十何%かを保護区にする目標を掲げようとしています。ただ、先進国は高く設定し、途上国は低い数字に設定したいので難しくなっています。現状では“ペーパーパーク^{**3}”を含め12、13%と言われますが、人が住まない生態系はなくなってきているので、アメリカの国立公園のような形の人間が触らず守る保護区というのはこれ以上作ることは難しくなっています。

日本には人間がうまく自然資源を使うような知恵が存在しました。森だけではなく海もそうです。来年も再来年も魚が獲れるように禁漁期を設けるなど、昔から自然とうまく付き合い、守っていくような日本的な自然との付き合い方がこれからの生物多様性保全において非常に可能性を秘めているのではないかと考えています。

草野 その考え方は新しいですね。日本に住んでいると感じることは少ないですが、ほかの地域に住んでいる方にとっては貴重な情報や考え方、自然を持っているということが見えてきましたね。



※2 COP10 (Conference of the Parties)

COPとは国際条約の締約国が集まって開催する会議をいい、COP10は2010年10月に愛知県名古屋市内で開催された「生物多様性条約第10回締約国会議」の略。なお、生物多様性条約は1992年にリオデジャネイロにおいて開催された国連環境開発会議（地球サミット）の主要な成果として誕生し、多様な生き物や生息環境を守り、その恵みを将来にわたって利用するために結ばれた。

※3 ペーパーパーク

保全・保護が必要な地域として保護区（国立公園など）に指定・登録されているが、管理が行き届かず実質的に保全・保護できていない保護区。

生物多様性を守るためできることは、知ることから

草野 北海道には、国内外の人たちから貴重と思われる情報、物、ノウハウがたくさんある可能性が大きいと思いますが、北海道に住む私たちは、どうやってその生態系を保全し、自然と共生していけるのでしょうか。大橋さん、生物多様性を保全していくにあたって課題として感じていることがあればお話しください。



大橋 私は faura (ファウラ) という雑誌を通して自然を知ろうという活動をしています。自然について、私たちはほとんど知りませんよね、という気持ちで雑誌をつくっています。生き物

に170万種しか名前が付いてないというお話をしました。特に北海道は今までお話があったように、周りの自然に価値があるのに気付かない人が多いと感じています。私のような紙媒体、その他、いろいろな媒体で発信する側は多くの人に分かりやすく伝える責任があるし、受け取る側もどん欲に興味を持ってもらいたいと思っています。生物多様性は生活につながっていますから、知らないと損ですし、場合によっては知らないでは済まされないものです。まずは、どん欲に知る意欲を持ってもらうことが重要だと思います。



草野 そうですね。例えば、この水は札幌市内でとれる身近な水です。商品の背景が見えず自然が遠かったものでも、実は札幌の水とわかった瞬間に見え方が変わる。そこから、そのためにはどういった山が必要かと、

どんどん身近なものとしてとらえられるようになるのではないのでしょうか。

日比 先ほど日本は森林が残っているというお話をしました。でも残そうとして残ったわけじゃない、という見方もできるのです。私の出身地の神戸は市街地の

背景にすぐ六甲山がありますが、明治維新直後ぐらいの写真でははげ山です。また、浮世絵の東海道五十三次で見る遠景の山ははげ山です。要は人に近い自然ははげ山だったのです。例えば、エネルギーとして木を使う。鎖国をしていましたから国内で生活必需品をまかなっていません。つまり、見えるところに環境負荷が現れていたのです。緑が薪^{まき}としてなくなる、という状況が日常的でした。自然と一緒に暮らすというのはそういうことだと思います。環境への負荷が身近にあるのです。

それが今、食料自給4割、エネルギーや鉱物資源もそのほとんどを海外から輸入しています。自分たちが環境に与える負荷が見えなくなっています。日本は森林被覆率7割ですが、これは、実は日本で起こるべき負荷が海外に移っているだけという側面もあります。だからそれらを知らないといけないし、先ほど、パームオイルのお話をしましたが、それがどこから来ているのか、採るために現地がどのような状況になっているのかを知ることが大切です。しかも、この問題には、貧困問題にも関わりがあり社会問題も引き起こしていますが、意図せずとも結果的にそうになっています。あるいは農作物の生育には水が必要です。それでは、輸入農作物を育てるための水はどこから来るか、そうやって考えていくと、海外の森林だから知らないとは言えません。身の回りの向こう側を見通す好奇心や想像力が重要だと考えています。

草野 江戸時代は、住民は自分の生活のために山の木がなくなったと感じていた。それが今は生活の中で見えなくなったので、逆に積極的に知らないといけない。そのためには、主体的に情報を追っていくことが必要だ、ということですね。まず、住む環境をもっと知らないといけないですね。さらに、私たちの生活が海外とつながっていると考えると、それはどこから来て何で作られ、私たちの生活が成り立っているか。その二つの視点で学習をしていかないといけないと思いました。

生物多様性保全の重要性を知ったあとにできること、行動に移すには。北海道を生物多様性保全の中心地へ

草野 それでは、生物多様性保全が必要だということが分かった人が、具体的に行動を起こしたいと思ったらどのようなことができるのでしょうか。

大橋 現在、環境保全に関わるNGOやNPO、任意団体もありますね。個人活動でできることもたくさんありますが、組織化することでさらに力が発揮できると思います。ただし、それはボランティアとして活動しなければならないことが多いのですが、活動には資金が必要です。保全活動のために企業あるいは財団法人、行政、NPOや市民団体、助成金を出すところが多くなってきているとは思いますが、それでも助成金を得られにくいという声も聞きます。こうした状況を改善するには、その団体がやりたいことや活動意義をもっとアピールしていくことが大切なのではないでしょうか。

草野 そうですね、一般の方たちも環境団体などとのつながりが大事だと思うのと同時に、そうした団体が活動していくための資金集めが課題だと感じています。海外と日本では、そうした活動におけるお金の動きが違っていると思いますが、生物多様性についてのお金の流れの違いや差はありますか。

日比 例えば、欧米中心の多国籍企業が生物多様性に取り組む場合、1件あたりのプロジェクト支援額が年間数千万円から億単位になる場合も珍しくありませんが、日本ではそのような支援額になることは非常にまれで



す。良い人材を集めるためや直接経費などの費用がかかりますから、生物多様性を守る、ましてや経済が成り立つ形で生活と共生させるためのお金の流れを作らないといけないと思います。企業からの寄付金も流れを作り出すというのが一つあると思います。生物多様性に配慮した製品の市場が大きくなれば、社会の中でお金の流れを変えていくと思いますが、残念ながらそ

ういう視点は日本では弱いと思います。一般に助成金として支援の対象となるのは直接経費で、人件費や間接費には使えないことも多く、助成金をもらいながら活動するほど疲弊するということが珍しくありません。直接経費を助成してもらったために、それを使うために必要な人件費や間接費を自分たちで集める、あるいは手弁当でやる。それで疲れ果てる人が多いのが実情です。

大橋 生物多様性を守ることは必要なことだという認識が社会全体に起こってくれば、そこに社会全体で負担しようという考え方にもなってくるとは思いますが、まだ欧米に比べて社会全体としての取り組みや意識が遅れているということです。

日比 アメリカのNGOは非常に発達していますが、確かに税制優遇により寄付が集めやすいという側面があるのも事実です。しかし、それだけではなく公共のために使うお金という意味では税金も寄付も同じと納税者がとらえ、信頼できる良い団体に使ってほしいという意識が高くなります。そのため、どの団体を支援するか真剣に考えますし、団体が何をやっているか、効率的かなどを評価するNGOが存在します。NGO側は良い評価をされない寄付が少なくなるので効果的、効率的に運営し、透明性も高めるようにします。ある意味、寄付の市場メカニズムが成り立っているのです。

草野 ドイツを訪れたときに、貴重な洞窟^{どくつ}を保全するために多額の寄付を募っていることを聞きました。そのようなことが成り立つこと自体驚きましたが、支援者が選択し寄付することが保全活動の参加の意思だという考え方も浸透しており、これも参加の一つのあり方かなと思いました。「忙しいのでボランティアに参加できないので、違う形（資金面）で支えたい」と聞き、行動が第一と考える日本とは違う参加方法も根付いていると思いました。

これまで、お二人にいろいろなお話を聞きましたが、北海道の自然を守ることは、世界の視点からも生物多様性保全に貢献していることだと分かりました。また、

身近な環境、生活の成り立ちを知ること。そして、生物多様性保全への参加の仕方は必ずしも一つでないことが分かりました。最後にひと言ずつコメントをいただけますか。

大橋 生物多様性を守ることは、世界的にも避けられない時期にきています。それを認識し、それぞれが役割を果たす、そういう共通認識が持てればいいなと思いました。北海道は生物多様性の優れた地域で、流水の南限、ブナの北限でもあるし、素晴らしい自然があります。一方で、それは非常にもろく、ちょっとしたことで壊れることもありえるのです。これを守っていくことで私たち人間の暮らしも守っていく、そういう世界的な潮流を十分認識して行ってほしいと思います。

日比 種の絶滅リスクは生息地面積と指数関数的に反比例する、つまり広がるほど絶滅回避の可能性が高くなります。つまり、北海道は日本の中でも生物多様性を守る上で効果が高いところともいえます。北海道が日本の生物多様性保全の中心地になり、単なる自然保護ではなく、どうやって生活と共生させるのかという動きを生み出すようになることを期待します。

例えば、アメリカのコロラド州ボルダーという街では、アウトドアスポーツが盛んな街で、自然好きな人が集まり、コロラド大学では環境学が進んでいます。また、NGO活動が盛んで、環境にアンテナを張った人が集まり、そこからオーガニックスーパーが全国展開し、環境に配慮した新商品が生まれています。北海道がそのような場所になれる可能性があるのではと考えました。こうした動きは、自然との距離感が重要ですので、東京からはなかなか生まれてこないのではないのでしょうか。



地域の植物による緑化の説明のほか、どんぐりの苗づくり体験（雪印種苗株式会社）が行われました

併催

生物多様性展示コーナー

キーワード「生物多様性・自然環境・生活・食卓」

生物多様性フォーラムの併催として、北海道をはじめ、団体・企業による生物多様性保全の取組みについて発表する展示スペースを設置しました。すでに多くの生物多様性保全の取組みが身の回りで進んでいることを知ってもらい、生物多様性保全の意識を生活に取り入れることを期待したものです。展示ブースには、川にすむ生き物の展示やどんぐり苗づくり体験、資源米を活用したごみ袋の配布など、各出展者の工夫により、生物多様性について楽しく知ることができる展示コーナーになりました。

【出展団体】

北海道・三菱電機株式会社・財団法人セブン-イレブン記念財団・株式会社北洋銀行・財団法人前田一步園財団・雪印種苗株式会社・明治乳業株式会社・北海道コカ・コーラボトリング株式会社・地方独立行政法人北海道立総合研究機構・有限会社ナチュラルー「faura」・コンサベーションインターナショナルジャパン・環境NGO ezorock（順不同）



サッポロファクトリーアトリウムでは、生物多様性フォーラムと併催して展示コーナーを設けました



水槽の中には近くの川にすむ生き物が泳ぎ、身近な生物多様性を感じさせる展示（地方独立行政法人北海道立総合研究機構）もありました